

咳嗽症状とインフルエンザ感染症との関連についての検討

医仁会武田総合病院 総合診療科

松原英俊

【目的】インフルエンザは一般に急性上気道炎と混同されるが上気道症状に乏しい症例を少なからず経験する。今回咳嗽症状についてインフルエンザ特有の症状との時系列関係に着目してインフルエンザ感染症によって誘発されているかを検討した。

【方法】2010年11月1日から翌年3月31日の期間特定の医師の一般内科外来に受診しインフルエンザ症状を呈し迅速キットで陽性であった32例を解析対象とした。突然の全身倦怠感とそれに続く進行性の倦怠感、発症時点は不明なるも明らかに数時間程度の経過で倦怠感が進行性に悪化、高熱などが認められた時点インフルエンザ発症日とし、咳嗽の出現日との比較を行った。鎮咳剤の投薬があるか明らかな訴えがある場合咳嗽ありとした。

【結果】32例中咳嗽は75%に認めた。発症後48時間以内の28例全例に抗インフルエンザ薬が投与されていた。咳嗽の発症時期が特定できた13症例中2例は3週間以上の咳嗽が先行するアレルギー性鼻炎の合併を認めた。発症当日に咳嗽を認めた2例(15%)以外の11例は全て発症日より1日以上前から咳嗽があった。潜伏期間にあたる発症前1日以上3日以内の期間に咳嗽が出現した症例は7例(54%)だった。

【結論】多くの症例が潜伏期間である発症1～3日前に発現しており、咳嗽がインフルエンザ罹患によるものではなく、むしろあらかじめ存在していた上気道炎の症状であり、上気道に炎症が存在するため宿主はインフルエンザ易感染性になり感染が成立したと類推された。